

おわりに：謝辞として

筆者は、兵庫県で生まれ、その後は大雑把に言えば、関西、関東、そして沖縄の「間」を生きてきた。記憶にある最初のことばは、いわゆる関西弁である。いまでもそれに親しみを感じるし、話せる。小学校のとき関東に転居して、そのことばを笑われた記憶がある。大阪から東京までの列車の旅がまだ半日以上もかかったし、テレビがどこの家庭にもあるという時代でもなかった。関東の子どもたちにとって関西弁が妙なことばに聞こえたのも無理はない。しかし、すぐに自分も関東の子になった。中学から高校にかけて、まだアメリカの軍政下に置かれていた沖縄で過ごした時期がある。もっとも多感な頃だったので、関東の子から沖縄の子へ変わるの、簡単だった。したがって、出自と環境からして、筆者には3つの日本語の異型が共存している。言い換えれば、3つのアイデンティティがある。しかし、その3つはけっして別々ではなく、互いにつながっていることを感じている。

学校では当然のように英語を学ばされ、一方自らの意志ではフランス語を学んだ。人生最初の異国の地は、フランスだった。この2つの外国語が、その後永きにわたり国際文化交流に携わるきっかけの1つになったのは確かである。仕事を通じて、少なくとも35ヵ国を訪れた。いろいろな言葉で生活する人々の一端を垣間見るだけでなく、自ら英語やフランス語を使い、あるいは通訳の助けを借りて、文化交流の直中に身を置いている。この間、タイとオーストラリアでは家族と共に数年を過ごしたことがある。そして、いままたタイにいる。つまり、筆者の毎日は、自分のそれを含めて、さまざまなアイデンティティとの出会いであり、気づきの連続なのである。まるで、ことばの「間」を生きているようなものだが、じつはアイデンティティの「間」を生きている、という喩えのほうがかぶさわしい。どれも皆、顔つきも^{こわね}声音も、そして風貌も違うのだが、それぞれがそれぞれの時や場合や方法によってその「間」を生きている姿は、実はそうは違わないと思う。

しかし、アイデンティティは、いつも安穩に「間」を生きているわけではなく、時折その「間」を塞いでしまったり、遠ざけてしまったりすることがある。それは、自分の中に理想を見て、相手にもそれを求めるとき、そのどちらかが叶わなかった時ではないだろうか。アイデンティティは、まるで生き物のように、あるいはその細胞の1つひとつのように、いつも同じではいられない。生きるということ、それ自体がアイデンティティの実像なのかもしれない。ことばは、それを気づかせ、そしてそれぞれのアイデンティティの「間」をつなぐ、人間に与えられた1つのユニバーサルリティなのだろう。だとすれば、「間」はできるだけ公共のものでなければならない、と思う。筆者は、日本語教育を通じて、さまざまなアイデンティティと、その公共性を分かち合いたい。それが、いま自分に与えられた使命であり、もう1つ自分に加わった新しいアイデンティティなのだ、と実感している。

本論文のテーゼは、筆者自身の内部において、ひとまずそこに収斂する。思えば、言語・文化・社会の相関への強い探究心は、国際交流基金の命を受けて最初のバンコク勤務（1990-93年）をしているときに芽生えた。前述のとおり、かねて自らの出自や環境ゆえに複数の言語的アイデンティティを抱いていた筆者が、その間もっとも刺激を受けたのは、一橋大学の田中克彦教授の一連の著作であった。そして、バンコクから戻り、大阪大学大学院言語文化研究科で修士号を取得し、その直後にシドニーでの日本語教育担当（1997-2001年）を命じられたのは、幸運としかいいようがない。およそ5年を過ごしたシドニーでは、それこそ多くのアイデンティティの「間」を生きたと思う。やがて2007年には、基金の「日本語グループ」を統括することとなり、同年4月、そこに至るきっかけの1つとして因縁浅からぬ一橋大学大学院言語社会研究科の一員に加えていただいたのも、また幸運であった。そしていま、再訪したバンコクでこの博士論文を書き上げることになるとは、数々の奇縁を感じずにはいられない。このあとも、これらが確実に筆者のアイデンティティを彩り、公私共にまた新たな縁を結ぶことだろう。

本論文の執筆は、一橋大学大学院言語社会研究科の多くの人材に恵まれなければ完成しなかつたろう。佐野泰雄同研究科長・教授はじめとする関係者各位に、まず感謝申し上げます。とりわけ、この3年に亘る指導教授であり、本論文審査の主査でもあるイ・ヨンスク教授から、学問的にも、人間的にも多くの刺激を受けたことは、幸いであった。イ教授の『国語という思想』をはじめ、学術的にしてかつ流麗な筆致の諸著作、そして常に示唆と励ましに富んだゼミでの論説・指導に接したことは、本論文のみならず、筆者自身の今後の研究生活の糧ともなったのである。ここに、深甚なる謝意と尊敬の念を表したい。同じく論文指導をいただいた五味政信教授ならびに糟谷啓介教授に対しても、それぞれ謝意を申し上げます。また、講義・ゼミでお世話になった秋谷治教授、井上優連携教授にもお礼を申し上げたい。一方、大学外の知己・友人として、平高史也慶応義塾大学教授および春原憲一郎 AOTS 日本語教育センター長には、本論文の端々に織り込んだ「人間味のある日本語教育」というメッセージの種をいただいたので、これからの交誼をもふくめて、ここに特に謝意を記す次第である。同じく、国際交流基金の上司、同僚、後輩、そして多くの友人・知己をもこの列に加えたい。

最後に、筆者が最大級の謝意を表すべきは、これまでの研究と本論文の執筆に惜しみない理解を示し、自らの不便や不都合を厭わずに協力してくれた妻・ひろみと、息子・駿にほかならない。その結実として、本論文を2人に捧げる。願わくは、論文で主張したことの一部なりとも、実現したいものである。

2009年10月